

大学生の放課後の生活空間

蓮見元子*・北原靖子**・川嶋健太郎***
佐藤哲康****・生駒忍*****

A Study on the After School Life of the University Students

Motoko HASUMI, Yasuko KITAHARA, Kentaro Kawashima,
Tetsuyasu SATO, Shinobu IKOMA

要 旨

放課後の生活は、学校での学びを支える体験学習の機会として大切であり、子どもの社会性の発達や人間関係づくりを通じて人間力を身につけるためにも不可欠である。今日、放課後、学習塾やお稽古ごと、テレビ視聴やゲームなどで過ごす小学生が多いのが実態であろう。他方、大学生の放課後の過ごし方はどうであろうか。青年期の発達課題は、洗練された男女の交際を学ぶこと、両親から情緒的に独立すること、将来に備えて、高度で専門的な勉学に傾倒することなどである。しかし、今日の我が国では、大学生の学力低下が指摘され、高度な専門科目を極めるどころか、リメディアル教育なるものが叫ばれるようになった。

2008年から始まった我々の放課後の子どもの過ごし方と居場所に関する一連の研究の最終目的は、小学生から大学生に至るまで可能な限り共通する質問項目で、各自が放課後の過ごし方および居場所を自己点検し、放課後の生活の実態を評価できる汎用性の高い尺度を作成することである。

本研究は、小学校低学年保護者用放課後生活空間評価尺度の作成を試み、さらに、大学生の放課後生活の実態を明らかにし、より洗練された大学生用放課後生活空間評価尺度を作成しようとするための予備的研究である。

キーワード：放課後の生活、大学生、評価尺度

*教授 発達心理学

**発達心理学

***尚綱大学短期大学部 学習心理学

****助教 臨床心理学

*****非常勤講師 認知心理学

【問題と目的】

子どもたちの「時間、空間、仲間」の3間が喪失されていると言われて久しい。筆者らは、ここ数年、子どもの放課後の生活実態に対する危機感および子どもの健全な育ちを支援する立場から、多面的な教育心理学的研究、すなわち、「放課後子ども教室」や放課後の子どもの居場所に関する調査研究（平成20～21年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「子どもの声を適切に反映する自己点検システムの開発」、平成21年度こども未来財団委託調査研究「放課後子どもプランの実際の運営についての自治体レベルでの評価指標作成に関する研究」、平成20～22年度川村学園女子大学教育研究奨励研究、平成24～26年度科学研究費基盤研究（C）「放課後生活空間評価尺度の作成」）などを行っており、研究成果を本紀要や心理学関連の学会を中心に発表してきた（北原・蓮見・川嶋・浅井，2008 蓮見・北原・川嶋・浅井，2009，蓮見・川嶋・北原・浅井2010，他）。学校が終わった後の放課後や長期休暇を子どもがどのように過ごすかが、その後の子どもの発達や学習に大きな影響を及ぼすと考えるからである。

かつては、地域の空き地などで、子どもたちは自然発生的に異年齢集団を形成して遊び、こういった遊び集団を通して社会性などが育まれる「もう一つの学校」（放課後の生活空間）があった。しかし、高度成長期を境に外遊びの場が失われ、また、情報化社会の進展に伴う子どもの遊びの変容とともに、大勢の子どもたちが一緒になって外で遊ぶ姿を見かけなくなった。従来より、放課後の子どもの生活空間の中心は家庭であるが、今日では学童保育室のような保育に欠けるという特定の子どもを対象とする場やすべての子どもを対象とする公的施設として児童館・児童遊園などの場、また小学校に付設された放課後子ども教室などの場を利用している子どもも多くなっている。子どもの健全な成長にとって、学習を中心とする学校での生活とともに、仲間同士の遊びを中心とする放課後生活は重要な意味を持っている。先述したように、放課後、同年齢の仲間と自由に主体的に遊べる広場や公園、市民団体や住民ボランティアの手による「放課後の子どもの居場所づくり」の取り組みが広がっているものの、まだその数は少なく、大多数の子どもたちにとっては、塾やお稽古事の場が放課後の居場所としての実際的な機能を担っていると言ってよいであろう。放課後生活の充実は、学校での学びを支える体験学習の機会としても大切であり、子どもの社会性の発達や人間関係づくりを通じて人間力を身につけるためにも不可欠である。小学校の教員たちは、児童に対して、放課後「外で体を動かして遊ぶ」「読書をする」「たくさん子どもと一緒に遊ぶ」ことなどを望んでいたが、実際は学習塾やお稽古ごと、テレビ視聴やゲームなどで放課後過ごしていると考えていた（蓮見・他，2010）。

他方、大学生の放課後の過ごし方はどうであろうか。ハヴィガースト（1953）によると、大学生の時期である青年期の発達課題は、洗練された男女の交際を学ぶこと、両親から情緒的に独立すること、将来に備えて、高度で専門的な勉学に傾倒すること、などである。しかし、今日の我が国では、大学生の学力低下が指摘され、リメディアル教育なるものが叫ばれるようになった。蓮見・他（2012）は、勉学にあまり勤まらずに、アルバイトに明け暮れ、かつて盛んであった部活動や学生委員会が衰退し、友人関係も希薄で、家でゲームをするなど放課後を一人で過ごすことが多い高校生や大学生の実態を明らかにした。

小学校低学年児童の放課後の生活の実態調査から始まった我々の放課後の過ごし方と居場所に関する一連の研究の最終目的は、小学生から大学生に至るまで、可能な限り共通する質問項目で、放課後の過ごし方および居場所を自己点検し、各自が放課後の生活の実態を評価できる汎用性の高い尺度を作成することである。

そのために、まず、我々は放課後こども教室という主に低学年児童が利用する場において実施できる低学年児童向けのアンケートとしてタッチパネル式アンケートを開発した。タッチパネル式アンケートはその場に集う子どもや大人の声を「きちんと尋ね・正しく受け止める」自己点検評価のあり方を検討する手段として開発されたものであった。文字と音声を同期させ、読み書きの負担を減らし、わかりやすい表現で、タッチパネル式パソコンを使って尋ねると、1年生でも「自分はそこで何をしたいのか、何はしたくないのか」を十分明確に回答できた（蓮見・北原・川嶋・浅井、2009）。しかしながら、子どもが回答するにあたって、パソコンの操作は容易であっても、個別対応が必要で、一度に多くの子どもを調査することは困難であった。大勢の子どもに対して一斉に調査を実施するには通常の質問紙調査が有効であるが、小学校低学年では読み書きや集中力が不十分なため、質問紙調査の実施にあたっては、例えば、クラスの中で担任教師による読み上げや記入指示が不可欠であり、また、質問項目の文言や回答の形式を極力具体化すべきことなどの困難さを伴うことが明らかとなった（北原・他、2013）。

子どもを取り巻く環境の悪化が懸念され、低年齢児童に向けた「場」が提案工夫されている今日の情勢をふまえるなら、なおさら、低学年児童から参加できる回答様式の工夫が求められるが、上述したように様々な困難さがあるために、低学年児童の声は、しばしば保護者や設置者などの大人によって代弁されてきた。しかしながら、彼らが自分の関わっている「生活空間」にどれほど満足しているかは、直接当事者の声として尊重されるべきであろう。そして、さまざまな場の自己点検評価と環境調整に利用できる汎用性の高い放課後生活空間評価尺度の開発が求められよう。

筆者らは、2012年には、小学校低学年児童及び保護者を対象として、妥当性、信頼性のあ

る放課後生活空間評価尺度（小学生用）の作成をめざした（蓮見・北原・他，2012）。低学年児童の場合は，発達の特性上，質問項目の数を極端に少なくせざるを得ない。また，4件法や5件法で回答を求めるのは難しく，はい，いいえの2件法で実施せざるを得なかったが，そうすると因子分析などが適応しにくくなってしまふ。そこで，児童用放課後生活空間評価尺度を作成するにあたって，児童と保護者に共通する質問項目を用意し，母子間の回答の相関が有意であることを確認した上で，保護者の回答を因子分析し，保護者の項目と同一項目で構成される児童用の2因子8項目（1. あそびにいくところがなくていえであそびますか 2. ひとりきりであそびますか 3. たくさんのともだちといっしょになってあそびますか 4. ほかのがくねんのひとといっしょですか 5. いくところはひろいそとですか 6. あそびにいくところがたくさんありますか 7. そとにでてうんどうしますか 8. おにごっこやかけっこをしてそとであそびますか）の尺度を作成した。しかしながら，実施上の制約もあって，児童用の尺度の信頼性・妥当性については十分検証されたとは言えず，また，8項目だけでは，放課後の子どもの活動についても子どもたちが過ごす場所についても十分網羅しているとはいえなかった。そこで，保護者による低学年児童の放課後の生活を評価する尺度の作成を行うこととした。さらに，先行研究がほとんどなかったので，小学生低学年保護者用の放課後の生活空間尺度の質問項目を分析吟味し，大学生が自己評価できる放課後生活空間尺度の作成も試みることにした。

研究Ⅰ 小学校低学年保護者用放課後生活空間評価尺度の作成の試み

目的

保護者による低学年児童の放課後の居場所や活動に関する有用性のある生活空間評価尺度を作成する。

方法

調査協力者 首都圏にあるA市内5地区の公立小学校5校の1年生児童の保護者（591名）を対象とし，2010年11月に第1回目の調査を行った。その翌年の2年生時に第2回目，2012年の3年生時に第3回目の調査を行った。同一の質問紙を，同一対象者に3回繰り返して実施した。今回の分析では，3回とも調査に参加し，欠損値のない434名分のデータを使用した。

材料 蓮見・北原・他（2009, 2010）の放課後の活動と居場所に関する調査を元に，小学校低学年児童の保護者用のアンケートを作成した。質問項目は，放課後の活動と居場所に関する質問項目（平日の子どもの放課後の過ごし方に関する10項目，自宅以外で子どもが放課後過ごす場所に関する10項目，子どもの放課後について保護者自身が感じていることに関する6項目）の計26項目と，尺度の内容的妥当性・関連性を検討するために用意された仲間関係づく

り評価尺度の10項目で構成されていた。いずれも、各質問項目が放課後の子どものようにどのくらい当てはまるかという当てはまり度を尋ねるものであった。

結 果

放課後の活動と居場所に関する26質問項目の回答について、「当てはまる」を4、「やや当てはまる」を3、「あまり当てはまらない」を2、「当てはまらない」を1として、項目分析を行った。回答の偏りがなかったため、26項目すべてで因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。固有値1基準で因子を抽出し、さらに因子負荷量.40以上の基準で、どの因子にも負荷しない項目の削除を繰り返し、最終的に19項目が残り、5因子が抽出された（表1）。第1因子は、「ケガや病気になった場合に対処する大人がいる」などからなり『安心安全』、第2因子は「たくさん子どもと一緒に遊んで遊ぶ」などからなり『仲間』、第3因子は、「子どもはこの地域でのびのびと育っている」などからなり『地域の支え』、第4因子は、「自分で遊びを創意工夫する」などからなり『工夫』、第5因子は、「多少危険でもチャレンジできるものがある」などからなり『チャレンジ』とそれぞれ命名した。なお、因子ごとにCronbachの α 係数を算出したところ $\alpha=.712 \sim .867$ であった。

低学年児童の保護者用放課後生活空間評価尺度の下位尺度ごとに算出された平均評価得点、および5つの下位尺度の平均評価得点を合計した総得点と、仲間づくり評価尺度得点との関連について検討するために、Pearsonの積率相関係数(r)を算出した。放課後生活空間評価尺度総得点と仲間づくり評価尺度得点との間に有意な相関($r=.296$ ($p < .001$))が認められた。さらに、第2因子「仲間」との間には $r=.281$ 、第3因子「地域の支え」との間には $r=.229$ 、第4因子「工夫」との間には $r=.314$ 、第5因子「チャレンジ」との間には $r=.108$ といずれも $p < .01$ 水準の有意な相関が示された。

考 察

低学年児童が充実した放課後を過ごしているかを評価するための低学年児童保護者用放課後生活空間評価尺度の開発を試みた。放課後の生活評価得点が仲間づくり評価得点と関連しており、尺度としてのある程度の妥当性も示唆された。

5つの因子が見出されたが、そのうちの「安心安全」、「地域の支え」は放課後の子どもの居場所に関するもの、「仲間」「工夫」「チャレンジ」は子どもの活動に関するものであった。筆者らは2012年に児童用放課後生活空間評価尺度を試みたがその項目内容は児童が放課後行っている活動に関するもので、生活空間や居場所に関する項目は項目として残らず、今回行った保護者用で可能となった。本調査では放課後子ども教室の設置効果の検証も目的としていたため、児童の放課後の生活空間を家庭以外と限定していた。しかしながら、今後は家庭も含めた

表1 保護者用放課後生活空間評価尺度の因子パターン

	I	II	III	IV	V
I 安心安全 ($\alpha=.811$)					
ケガや病気になった場合に対処する大人がいる	.885	.061	-.011	.024	-.128
子どもの顔を知っている大人がいる	.840	.062	.050	.010	-.148
しつげをしてくれる大人がいる	.745	.002	.011	-.030	.132
いろいろなことを教えてくれる大人がいる	.649	.089	-.060	.000	.194
不審者が侵入しないように監視されている	.576	-.141	.013	.022	.097
II 仲間 ($\alpha=.801$)					
鬼ごっこやかけっこなどの外遊びをする	-.100	.812	-.012	.049	.001
たくさんの子ともと一緒に遊ぼう	.005	.762	.024	.000	-.007
外に出て運動をする	-.171	.742	.002	.026	.052
他に行くところがなくて家で遊ぶ	-.142	-.580	-.066	.085	.001
自分ひとりきりで遊ぶ	-.114	-.505	.054	.019	.099
他の学年の子ともと一緒に過ごす	.199	.422	-.016	.011	.043
III 地域の支え ($\alpha=.767$)					
子どもはこの地域でのびのびと育てている	-.055	-.044	.808	.044	-.034
放課後の子どものよい居場所が近場にある	-.024	.073	.681	-.034	.040
子どもは地域の人々に支えてもらっていると思う	.168	-.088	.628	-.023	.012
子どもが放課後していることには満足している	-.043	.163	.495	.025	.036
IV 工夫 ($\alpha=.778$)					
自分で遊びを創意工夫する	.060	-.063	.039	.849	-.068
自分から新しい遊びを見つける	-.034	.065	-.028	.746	.080
V チャレンジ ($\alpha=.712$)					
多少危険でもチャレンジできるものがある	-.023	.025	.074	-.037	.727
新しい体験ができる	.154	-.064	-.053	.049	.709

放課後の生活全体ととらえ、質問項目を精査し、尺度の妥当性及び信頼性を確かめていくと同時に、充実した放課後生活は児童の仲間関係づくりの促進や学校への適応と関連するのか、子どもの放課後生活空間における評価が学年の上昇に伴ってどのように変化するのか、などについても検討していく必要がある。さらに、上級の学校段階での子どもたちの放課後についてもその実態を明らかにし、放課後生活空間を評価できる汎用性のある尺度の作成が求められよう。

研究Ⅱ 大学生の放課後の生活空間について

問題と目的

大学生の放課後の生活は他の学校種に通う子どもたち以上に学生自身が自由に活動を選択しうるものであり、個人の価値観や時間的展望などが反映されるものである。学生生活の充実感・満足感、大学への適応や大学生の時間的展望については今日まで様々な研究がなされてきたが、大学生の放課後の生活については、ほとんど研究がなく、その実態もはっきりとわかっていない。大学生生活の満足度に関する研究では、牧野・森（2002）の研究があり、大学生生活の満足度は、大学の授業、大学が与える付加価値、大学の物理環境が影響していた。大学の物理的環境（立地条件、食堂など）は同じ地方都市にある私立大学と比べると国立の大学の方が高く、付加価値、教育機器、先生との関係は私立大学で高かった。授業については2つの大学の間に差がなく、どちらの大学でも「授業についてはもっとわかりやすく、易しくしてほしい」という要望が多かったという。中村・林・板津（1986）は学生生活の充実感について調べた。先生との繋がり、授業への参加、友人関係、無気力感、学習態度、大学への帰属意識、サークルと授業における存在感、目標獲得と達成、日々の生活、スポーツ、遊び中心の生活の11因子が見出され、友人関係に関する因子の因子得点が上位を占めた。なお、学生生活の充実感は達成動機、意欲減退、内的統制と関連していた。大久保・青柳（2003）は4つの因子からなる29項目の大学生用適応感尺度を作成した。構成概念妥当性として抑うつ尺度との関連を検討し、負の相関が得られている。都筑ら（2010）は大学生の生活と意識に関する調査研究を行い、12の活動に対して、費やしている時間とエネルギーについて5件法でたずねた。得点が高かったのは、友人との交際、趣味の活動、授業、サークルの順であった。同好会、部活動、ボランティア、インターンシップ、就職活動は得点が低く、7割の学生がしていなかったという。アルバイトや資格のための勉強については、している学生としていない学生が2極化していた。さらに、時間管理、計画性といった時間的展望の高さは、生活の規則性、生活スタイルの高さに関係し、さらにそれが、主観的健康度を高くさせ、将来への希望や、自尊心に影響していると結論付けている。

他方、大学生の放課後の生活空間に絞った調査研究はほとんど見当たらず、その活動実態や生活環境はあきらかになっていない。本研究の目的は、大学生の放課後の活動と生活空間を評価するような尺度を作成することである。今日まで我々が扱ってきた小学生の放課後生活に比べ、大学生の放課後の活動は多岐に渡り、生活空間は拡大しているであろう。尺度作成の参考となるような先行研究がなかったので、調査項目は、小学校低学年保護者用放課後生活空間評価尺度（研究Ⅰ）の項目と可能なかぎり共通できるものを入れ、さらに、大学という学校段階

で特有な、学生たちの活動を検討し、項目を選定することとした。なお、今回の調査では、回答に自由記述の部分を作り、学生の生活実態がわかるようにした。

大学生の放課後生活が充実していることは、精神的な健康をもたらし、大学生生活の適応感や充実感と関連するのではないだろうか。今回は、大学への適応感との関連性を検討してみたい。

方法

研究対象 A大学、B大学計149名（男41名 女108名）、学年は1年生が73名、2年生が71名、3年生が4名、不明1名。A大学は女子学生のみ。B大学は共学だが、ほとんどが男子学生。A大学の学生149名中29名は、構成概念妥当性を検討するために追加調査された。

材料 大学生用の放課後生活に関する調査用紙を作成した。質問項目は大学生生活、放課後の課外活動、生活空間、アルバイトなどについて尋ねるものであった。自由記述式のものと同質問項目に対する当てはまり度を4件法で回答するもので構成されていた。妥当性の検討として大学への適応感尺度（磯部・上村，2007）を使った。

手続き 2013年1月、および6月に教室内で質問紙を配布し、回収した。

結果と考察

表2には、放課後の過ごし方について、自由記述式で行われた回答結果を示した。通学日数、部活動、アルバイトなどの実態についての回答から、大学生では、多くの学生がアルバイトをしており、3～5万円程度の収入を得ていること、部活動に参加している学生は多くはなく、

表2 大学生の放課後の生活 N=120 ()は回答者数

質問項目	回答
通学日数は？	4日 (6) 5日 (108) 6日 (2)
部活動はしていますか？	はい (48) いいえ (72)
部活動の日数は週に何日？	1日 (22) 2日 (12) 5日 (4)
アルバイトはしていますか？	はい (69) いいえ (51)
アルバイトの種類は？	飲食店 (29) 居酒屋 (5) スーパー・コンビニ (8) 家庭教師・塾 (6)
アルバイトの日数は？	2日 (15) 3日 (22) 4日 (17) 5日 (10)
アルバイト収入は？	2万円 (6) 3万円 (10) 4万円 (11) 5万円 (11) 6万円 (5) 7万円 (6)
理想的な放課後の過ごし方は？	程よくバイトをして程よく遊びたい いえでごろごろしたい 図書館で勉強したい 買い物に行ったりご飯を食べに行く 友だちと遊びに行く サークルではじけたい など

活動日数も週1日程度であることがわかった。

次に大学生用放課後生活空間評価尺度作成のために33の質問項目を用意し、「当てはまる」を4、「やや当てはまる」を3、「あまり当てはまらない」を2、「当てはまらない」を1として、項目分析を行った。

図1に各項目における回答の当てはまり度（当てはまる～当てはまらない）の比率を示す。「当てはまる」及び「大体当てはまる」という肯定的な回答が多かった項目は「建物の中や室内で過ごす」、「メディアを見る」、「アルバイトをする」、「友人、恋人など親しい人と過ごす」「買い物をする」「自分ひとりきりで過ごす」「アルバイトをする」「他にいくところがなくて家で過ごす」などであった。

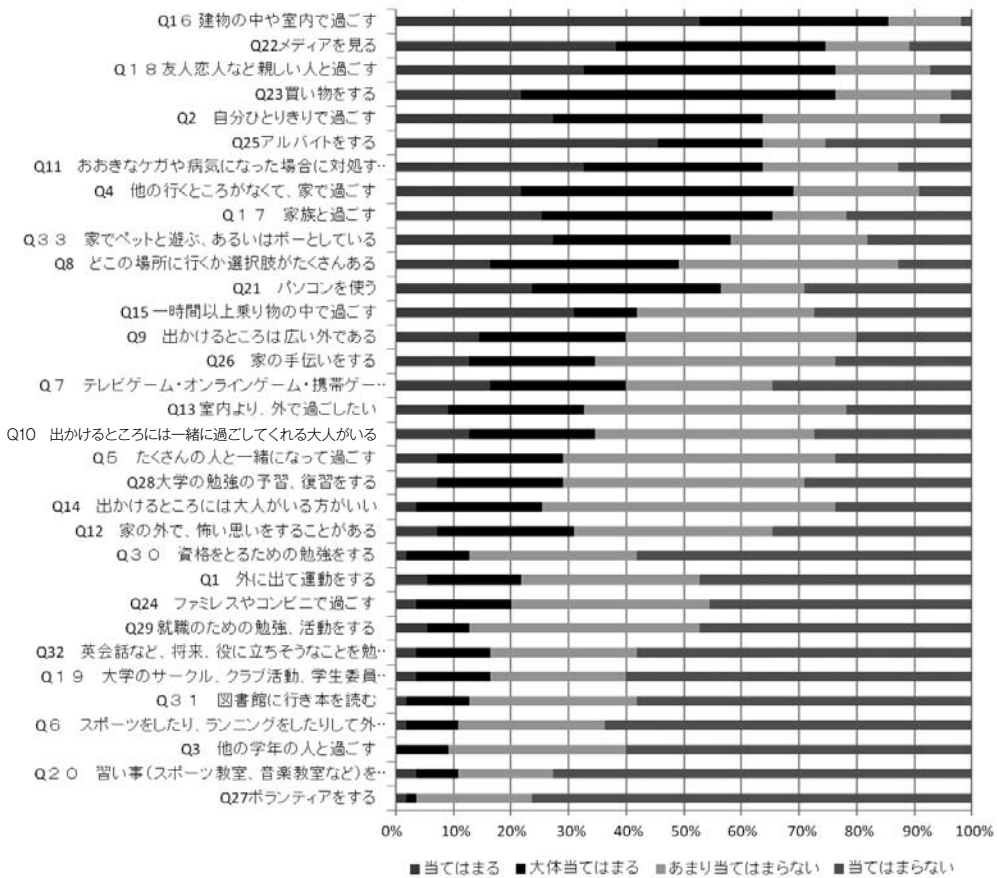


図1 各項目における回答の当てはまり度の比率

「当てはまらない」及び「あまり当てはまらない」という否定的回答が多かった項目は「ボランティアをする」「習い事をする」「他の学年の人と過ごす」「スポーツをしたり、ランニングをしたりして外で過ごす」「図書館に行き本を読む」「大学のサークル、クラブ活動、学生委員会などをする」「英会話など将来役に立ちそうなことを学ぶ」などであった。

次に、すべての項目で回答の偏りがなかったため、33項目で因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った（N=149）。固有値1基準で因子を抽出し、さらに因子負荷量.40以上の基準で、どの因子にも負荷しない項目の削除を繰り返し、最終的には28項目が残り、7因子

表3 大学生の放課後の生活空間に関する回答の因子分析（パターン行列）
パターン行列 a

	因子						
	1	2	3	4	5	6	7
Q30 資格をとるための勉強をする	1.037						
Q29 就職のための勉強、活動をする	.895						
Q32 英会話など、将来、役に立ちそうなことを勉強する	.816						
Q28 大学の勉強の予習、復習をする	.705						
Q31 図書館に行き本を読む	.686						
Q27 ボランティアをする	.554						
Q6 スポーツをしたり、ランニングをしたりして外で過ごす		.916					
Q1 外に出て運動をする		.668					
Q9 出かけるところは広い外である		.653					
Q13 室内より、外で過ごしたい		.573					
Q16 建物の中や室内で過ごす		-.554					
Q5 たくさんの人と一緒に過ごす		.530					
Q17 家族と過ごす			.908				
Q11 おおきなケガや病気になった場合に対処する大人がいる			.582				
Q15 一時間以上乗り物の中で過ごす			.572				
Q26 家の手伝いをする			.477				
Q21 パソコンを使う				.871			
Q22 メディアを見る				.602			
Q25 アルバイトをする				-.499			
Q7 テレビゲーム・オンラインゲーム・携帯ゲームなどをする				.463			
Q18 友人恋人など親しい人と過ごす					.649		
Q8 どの場所に行くか選択肢がたくさんある					.512		
Q23 買い物をする					.488		
Q4 他の行くところがなくて、家で過ごす						.741	
Q2 自分ひとりきりで過ごす						.579	
Q33 家でペットと遊ぶ、あるいはボーとしている						.472	
Q19 大学のサークル、クラブ活動、学生委員会などをする							.701
Q3 他の学年の人と過ごす							.539

（因子負荷量.40以下を省略）

が抽出された。なお、因子ごとに α 係数を算出したところ、 $\alpha = .490 \sim .788$ であった。

第1因子は「資格をとるために勉強する」、「大学の勉強の予習、復習をする」などで『自己研鑽』と命名した。第2因子は「室内より外で過ごしたい」などで『戸外活動』、第3因子は「家族と過ごす」「家の手伝いをする」などで『家族』と命名した。第4因子は「パソコンを使う」「アルバイトをする」などで『個人的活動』、第5因子は「友人恋人など親しい人と過ごす」「たくさんの人と一緒にあって過ごす」などで『社交性』、第6因子は「自分ひとりきりで過ごす」などで『一人ぼっち』、第7因子は「大学のサークル、クラブ活動、学生委員会などをする」などで『サークル・クラブ活動』とそれぞれ命名した。

生活空間に関連する項目（たとえば、「おおきなケガや病気になった場合に対処する大人がいる」、「他の行くところがなくて家で過ごす」、「室内より外で過ごしたい」、「出かけるところは広い外である」、「建物の中や室内で過ごす」など）も質問項目として入っていたが、因子分析の結果、除かれてしまうものが多く、また、因子を構成することもなかった。放課後の活動が中心の因子構造となった。

因子ごとにA大学とB大学の下位尺度平均得点を比較したところ、下記のような結果であった（表4）。A大学の得点がB大学の得点に比べ有意に高かったのは、「自己研鑽」と「家族」であり、逆にB大学では「個人的活動」が有意に高かった。総じて両大学の学生とも、「個人的活動」「社交性」「一人ぼっち」の平均因子得点が高く、「クラブ・サークル」、「自己研鑽」の平均因子得点が低かった。

表4 7つの下位尺度平均得点の比較

	A大学	B大学	差異 (t-test)
自己研鑽	2.25	1.83	A > B **
戸外活動	2.42	2.46	
家族	2.58	1.76	A > B **
個人的活動	2.48	2.80	A < B **
社交性	2.72	2.71	
一人ぼっち	2.62	2.77	
サークル・クラブ	2.07	1.76	

**p<.01

構成概念妥当性を検討するため、大学生の放課後生活空間尺度と学校適応感尺度における下位尺度間の相関係数を算出し、表5に示す。「自己研鑽」は「課題問題の存在」と有意な相関があった。「戸外活動」は「居心地の良さの感覚」、「課題問題の存在」、「被信頼受容感」と有

表5 大学生の放課後生活空間尺度と適応感尺度との関連性

	自己研鑽	戸外活動	家族	個人的活動	社交性	一人ぼっち	サークル・クラブ
居心地の良さの感覚	.150	.431*	-.137	-.044	.434*	-.170	.360
課題問題の存在	.465*	.371*	-.046	-.116	.382*	-.120	.431*
被信頼受容感	.344	.540**	-.060	-.094	.313	-.315	.453*

**p<.01, *p<.05

意な相関があった。「社交性」は「居心地の良さの感覚」, 「課題問題の存在」, 「サークル・クラブ」は「課題問題の存在」, 「被信頼受容感」と有意な相関があった。「一人ぼっち」「個人的活動」および「家族」の相関はいずれもマイナスの相関を示したが、有意ではなかった。

【総合考察】

子どもの健全な成長にとって、学習を中心とする学校での生活とともに、同年代の仲間同士の活動を中心とする放課後生活は重要な意味を持っている。低学年児童が充実した放課後を過ごしているかを評価するために低学年児童保護者用放課後生活空間評価尺度の開発を試みた。放課後の生活評価得点が仲間づくり評価得点と関連しており、尺度の妥当性が示唆された。今後は、児童の放課後の生活空間を家庭以外に限定せずに、家庭も含めた放課後生活としてとらえ、質問項目を精査し、尺度の妥当性を確かめていくと同時に、充実した放課後生活は児童の社会性の発達と関連するのか、子どもの放課後生活空間における評価が学年の上昇に伴ってどう変化するのか、などについても検討していく必要がある。

小学生では塾に通うものが多く、習い事もよくしていた(蓮見・他, 2012)。しかし、大学生になると、習い事に通っているものはほとんど見られず、勉学に勤しむより、アルバイトに従事する姿が明らかとなった。飲食店などで週3日ほどアルバイトをし、月3万円から5万円を稼いでいる学生が多く、底辺を支える安価な労働力となっていた。学生たちは授業とアルバイトとで疲れ切っており、運動もクラブ活動もせずに、家にまっすぐ帰り、一人で過ごすことが多いことも明らかとなった。また、将来に備えて自己研鑽することもそう多くはなかった。しかしながら、放課後、自己研鑽する時間を持ち、社交性があり、戸外活動やサークル・クラブなどに参加している学生ほど、大学への居心地の良さを感じ、大学で自分が認められている、他者から受け入れられているという被信頼受容感や、自分の行うべき課題問題の存在があった。したがって、これらの学生は大学生活とともに放課後の生活を充実させているといえよう。

今回の調査結果をもとに、対象となる大学や調査人数を増やし、より信頼性、妥当性のある大学生用放課後生活空間評価尺度の完成をめざすこととする。

【引用文献】

- ハヴィガースト, R.J. (1953) 莊司雅子 (訳) (1958) 人間の発達課題と教育 牧書店.
- 北原靖子・蓮見元子・川嶋健太郎・浅井義弘 (2008) 新規放課後活動に対する小学児童の満足度調査—子ども自身による「放課後子ども教室」評価の支援 川村学園女子大学研究紀要, 19-1, 85-104.
- 蓮見元子・川嶋健太郎・北原靖子・浅井義弘 (2009) 放課後子ども教室について児童の声を聴く—タッチパネル式パソコンを使って— 川村学園女子大学研究紀要, 20-1, 141-157.
- 北原靖子・蓮見元子・川嶋健太郎・浅井義弘・柴田恵江 (2009) 放課後子ども教室に関わる大人たち—我孫子市立第一小学校の学童保育保護者・教室サポーターを対象とした調査報告— 川村学園女子大学研究紀要, 20, 113-125
- 蓮見元子・川嶋健太郎・北原靖子・浅井義弘 (2010) 放課後の子どもの過ごし方に関する小学校教員の意識の分析 川村学園女子大学研究紀要, 21-1, 127-140.
- 北原靖子・蓮見元子・川嶋健太郎・浅井義弘 (2010) 放課後子ども教室がもたらす「育ち効果」の検討—大学の地域貢献に関する一報告—川村学園女子大学研究紀要, 第21巻第1号, 179-194.
- 蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・浅井義弘 (2012) 「小学校低学年児童及び保護者を対象とした放課後生活空間評価尺度作成の試み」川村学園女子大学研究紀要, 23-2, 163-174.
- 蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・浅井義弘 (2011) 「児童のコミュニケーション行動—仲間遊びのための言葉かけについて」 川村学園女子大学研究紀要, 22-1, 113-125.
- 蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・浅井義弘 (2012) 「高校生および大学生の放課後の生活について—小学生の放課後の生活と比較して—」 日本心理学会第76回発表論文集.
- 蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・中村真理・坂元歩美 (2013) 「低学年児童の放課後の生活空間について—子どもは放課後どこでどのようなことをしたいのか—」 日本発達心理学会第24回発表論文集, 482.
- 北原靖子・蓮見元子・川嶋健太郎・浅井義弘 (2013) 「小学低学年児童を対象とした質問紙による放課後生活評価調査」日本発達心理学会第24回大会論文集, 615.
- 牧野幸志・森 裕紀子 (2002) 大学生生活への満足度に関する教育心理学的研究—学生は大学に満足しているか—, 高松大学紀要, 37, 59-72.
- 中村昭之・林 潔・板津裕己 (1986) 学生生活の充実感について (3), 駒澤大学紀要, 195-225.
- 大久保智生・青柳 肇 (2003) 大学生用適応尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の視点から—, パーソナリティ研究, 20, 1, 38-39.
- 都筑 学・早川宏子・村井 剛・早川みどり・岡田有司 (2010) 大学生の生活と意識に関する調査研究—生活管理能力や生活の規則性と健康意識, 自己意識, 時間的展望との関連—, 中央大学保健体育研究所紀要, 28, 1-19.
- 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—, 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 磯部有希・上村佳世子 (2007) 大学への進学動機と学校適応感との関連, 文京学院大学紀要, 9, 1, 51-61.